様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22　年　5 月　18 日現在

研究種目:若手研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：19720232
研究課題名（和文）　キューバからの越境における希望と実践の人類学的研究

研究課題名（英文）　Anthropological Study of Hope and Practice of Cuban Diaspora

研究代表者
田沼 幸子　（TANUMA SACHIKO）
大阪大学･人間科学研究科･特任研究員
研究者番号：00437310

研究成果の概要（和文）：
本研究調査は、キューバ国内外の主に 30 代のキューバ人男女のインタビュー映像を通じて、グローバルな世界システムと革命、労働と生きることの意義とがどのように絡み合っているのかを普遍的な問題として提示することを目的とする。個人的なインタビュー調査を通じて、世界システムが各人の生を強く規程していると同時に、その制約を越えようとした各人の決断が大きく異なる現在をもたらしたことも示された。本研究を通じて、現実を見据えたうえで可能な理想を実現するために行動することの意義をより多くのオーディエンスに示すことができるようになった。

研究成果の概要（英文）：

This research aims to show that the global world system and revolution is deeply entangled to individuals' conception of work and meaning of life, through interview to Cubans in and out of the country, .Through personal life history video it was shown that the world system strongly regulates their life. But they also have made the decision that breaks this restrain and has made their life different. Through this research, it was indicated that it is meaningful to act to realize the ideal that is based on critical observation of the complicated reality.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,600,000	0	1,600,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	450,000	3,550,000

研究分野:人類学
科研費の分科・細目：文化人類学
キーワード：希望、越境、移動、仕事、グローバル

１．研究開始当初の背景

キューバからのディアスポラに関しては、従来、1959 年の革命直後に米国に亡命し成人したキューバ系米国人による研究が大半を占めていた。これはキューバを全体主義的な抑圧国家とするか米国を帝国主義的な抑圧国家とするかのいずれかの立場をとり、最終的にはその各国の政治批判の形を取った。あるいは、キューバが革命後、共産主義政権となり、資本主義的制度を批判するようになったことから、利益を追求するがゆえに非人間的だとする資本主義批判か、理想を追求するものの現実の人間のあり方に基づいていないがために非効率的だとする社会主義・共産主義批判がしばしばなされた。

しかし、以上の議論においては、しばしば論者の政治・経済的理想に都合のよい事例が選択されるため、事実関係の複雑さが捨象される傾向にある。例えば、米国に亡命した者の間やキューバに残る人々の間でも政治経済的価値観の違いが当然あるにも関わらず、そうした違いはごく瑣末なものであるかのように看過される。結果的に、移動するかしないかが、現キューバ政権の政治に対する是か非の立場を示すものであるかのように議論がなされる。しかし、政治経済的理由ではない移民もあれば、現政権に反対していても国を出られない者もいる。また、出国した場合、11 ヶ月が経過するとキューバ居住権が剥奪されるため帰国したくてもできない人がいることなど、現地特有の事情がある。

こうした現状の複雑さを示すために、報告者はこれまで数々の論文を発表してきた（５．主な発表論文等参照）。博士論文『ポスト･ユートピアのキューバ――非常な日常の民族誌』（2007 年、大阪大学）では、キーインフォーマントである 30 歳前後の男女 6 名や 60 代の男女 4 名のライフヒストリーとキューバで国民に示される政府による革命の語りと、国民が解釈する革命の語りとを照らし合わせ、国民が単純に革命を是か非か捕らえているわけではないことを示した。しばしば、国民は革命の指導者であり政権を（当時）になうフィデルおよびラウル・カストロをネタとした笑い話をする。それは一見すると、革命イデオロギーを軽視しているように見える。しかし、筆者の長期調査による分析では、反対に、本来、畏敬するものを笑うアイロニーなのである。そして国民が単純に指導者を笑いものにしないのは、自分たちが革命の主体である／あったという意識が多かれ少なかれあるからである。筆者はこの構えを「ポスト･ユートピアのアイロニー」と名づけた。そしてこのアイロニーが必要なのは、彼らが指導者からの愛に満ちた言葉をどこかで信じながらも、特にソ連崩壊後は、現実に行われている政治および経済政策が、社会主義の理念とは矛盾したものであるため、彼らがダブル･バインドに置かれているためである。グレゴリー･ベイトソンによればＡのＢに対するメッセージとメタ・メッセージが矛盾しているにも関わらず、B が A の保護を必要とするが逃げられない関係性の場合、B はこの矛盾を矛盾と受け取らないようにするがために統合失調症をわずらってしまう。これを避けるためには、B が矛盾を矛盾として指摘できるようになることーこれが「ポスト･ユートピアのアイロニー」の役割である。一方、B が A との関係性から逃げる、という方法もある。この場合はキューバ国外への移動である。本研究では、博士論文でとりあげた、当時 30 歳前後のキーインフォーマントが 2004 年を境に相次いで出国したのを受け、彼らのその後の追跡調査として行った。

２．研究の目的

上記１にあるように、先行研究は、キューバからの出国を、革命による政治体制への是非として捉える傾向にあった。しかし、本来、注視すべきなのは、彼らが研究過程で収集した各個人の感傷的な痛みと政治や世界システムとの絡み合いであり、善悪の区別が二項対立的に明確につけられるわけではないアンビバレンスの中にあるのではないか。

反世界システムを標榜するキューバという場に生を受けたにも関わらず、世界システムにまきこまれて移動を選択せざるを得なかった人々・移動できずにとどまる人々の現実を示すことによって、現実の政治と経済を理想のみで語り批判することが生産的ではないことを示そうとした。現実を変えるのは非常に限られた選択肢しかないとはいえ、個々人の決断である。しかし、その決断も、確固とした自信や確信によって支えられているわけではなく、状況に応じて、その時点で最善に見えるものに賭けてのものにすぎない。しかし、こうした個人の賭けとそれにまつわるアンビバレンスや感傷こそが長期の現地調査に基づく人類学的研究でこそとらえられるものであり、かつ、世界の別の場所で、別のアジェンダに関わっている人々に

も自己の問題として捉え考える契機となる。

３．研究の方法

上記２で述べたように、アンビバレンスや感傷を論文で示すのは難しい。このため、筆者は民族誌およびエッセイの形式でキューバの現状について報告してきた。今回の目的は、それでも救いきれない個々人の生々しい生のあり方を、映像でダイレクトに掬い取り、見せることにある。

そこで本研究では、インタビュー調査を録画･編集し、映像作品とすることによって、各人の思いの複雑さを捨象せず、示すことを試みた。

現地調査は過去の日程で行われた。

2007 年 8 月　イギリス、ロンドン
2007 年 8 月　スペイン、バルセロナ
2008 年 3 月　チリ、サンティアゴおよび
　　プンタ･アレナス
2008 年 7－8 月　キューバ、ハバナ
2008 年 12 月　アメリカ、テンペ（ｱﾘｿﾞﾅ）
2008 年 12 月　キューバ、ハバナ

撮影は以下の要領で行われた。
報告者自らが家庭用ビデオカメラを用いて撮影しながらインタビューを行った。時に三脚による固定カメラにしたが、多くの場合、手持ちで撮影した。これは数多くの人類学的映像を残したジャン･ルーシュが、手持ちカメラのほうが被写体との生き生きとしたやりとりを引き出すと論じていることから採用した。実際、移動中や別の作業をしている間に突然、興味深い話を始めた場合、手持ちで撮影するとその言葉を生み出す感情の力が臨場感を持ったまま記録できた。ただし、全体が手持ちのみだと見づらい場面も出てくるので、時に固定カメラで質問を決めたインタビューも行った。これは、過去の経緯などをインタビュイーが自らの言葉を探しながら語るというシーンを撮るのに役立った。

以上のようにして録画した映像を、次回、訪れた知人に見せ、そのリアクションも取り入れながら映像にした。全員が知り合いでありながら、多くの場合、2004 年前後の出国以来、再会もしていなければ映像で姿や話すようすを見てもいなかったので、それぞれ衝撃を受けたようだった。例えば、話すスペイン語に現地特有の言い回しやアクセントがついていたり、その一方で、食べ方や生活のあり方などは変わっていないといったことである。こうして映像で知人の姿を見ることによって、薄まりつつあったキューバや出国直後の記憶も鮮明になり、インタビューに対してよりビビッドな返答を引き出すことが出来たといえる。

４．研究成果

以上のようにして得たインタビューの録画テープの総時間数は 60 時間を越えた。これを元・日本ディレクターの市岡康子氏の指導のもと、60 分以内の映像作品「Cuba Sentimental」に編集した。

＜あらすじ＞

報告者が 1999－2004 年の間ののべ 2 年間で知り合った 30 代前後のキューバ人は多くがその後、国を去った。彼らの「移民」先での生活と思いはどのようなものか。

シグリはキューバでは歴史学専攻で、世界遺産に関わる古文書収集などをしていた。アメリカではホテルのバックヤードの清掃や整頓などを行っている。キューバにいては何も変わらないと感じ、両親が移民の抽選に当選したことから共に出国した。出国したことは後悔していないが、米国の経済システムや文化には違和感を持つ。このため、スペインに行くことを望んでいる。

ジェセルは知人に保証人になってもらい、イギリスの語学学校の生徒として渡英した。しかし知人との不和から家を追い出され、路上で出会った善意の人に泊めてもらうなど苦労を重ねた。撮影時はスペイン人女性と結婚し、居住権を得て、造園業を休職し、子育てをしていた。彼はキューバに戻りたくはないというが、イギリスでは外国人として強く疎外感を持っているらしく、かつてのキューバでの友人たちのことを語りながら目頭を熱くしていた。

マリオとリプシーはそれぞれヨーロッパの別の国への観光ビザで入国し、スペインに移動して超過滞在をした。その後、恩赦によって滞在は合法化した。リプシーは薬剤師としての資格を再取得して働いている。マリオは精神科医だったが、スペインでの再取得は難しく、現在、麻薬依存症者が自主的に麻薬を絶つために宿泊滞在する施設で週に 1 泊 2 日のみ指導員として働いている。しかし二人とも、より多く稼ぐよりも自由を優先するという。リプシーはバルセロナではない場所に行くことを希望しており、マリオは自分のつらい経験から、無料で受診できる移民のための精神クリニックを立ち上げることを目標としている。

ホルヘとロリエットはカナダに移民する予定だったが渡航費が工面できず、偶然によってチリに行くことになった。しかしいわゆ

る「先進国」へ行った友人たちよりもより早く、元の職業に近い仕事（精神科医と薬剤師）を得、わずか一年で永住権を獲得することができた。そして撮影時は専門職者として現地でも中流の生活レベルになっていた。しかし彼らも夢は豊かになることでも、チリに永住することでもなく、自分が信じる世界を実現すること、自由に旅すること、かつての友人たちと会うこと、できれば近くに暮らすこと、であった。

以上のように、出国したキューバ人たちは、自らの理想のために働くべきであるという革命の表通りのメッセージをそのまま体現すべく働いている。ただし、感情的には、現地への違和感や、孤独感があり、それがかつては批判の対象でしかなかったキューバへのノスタルジーを喚起している。

一方、出国した友人たちの様子を見たキューバ在住の人々の反応も複雑である。キューバでは生き延びるので精一杯なため、国外ではたとえ苦しくとも、自分が望む人生のために闘っていることをうらやむ者もいれば、以前はキューバではもっとあるべき世界についての理想を語っていたのに、現在は現地への順応のような問題に関心がとどまっていることを不満に思う者もいた。いずれにせよ、去った友人たちと残った友人たちとの再会は、喜びと同時に、もはや数年後としか会えないがゆえに悲しみや、互いの苦しみを分かち合えないことへのもどかしさを含むアンビバレントなものであった。

その間、キューバ在住の男性ひとりが反革命的であるとの理由で大学の職を追われる。多くの国では過去のものとなったイデオロギーの相違による困難はキューバでは健在である。

結局、キューバ国内にいる者も、国外にいる者も、自分がいる場所が最善の場所だとは思えない。しかし、少しずつであれ、変革のために毎日何かをしている。そしてそれを支えるのは、イデオロギーではなく、世界に離散した友人たちが互いに寄せる共感であり、いつかまた集まることができるという希望である。

今後はこの映像作品を用いて、グローバルな人･モノ･情報の移動や世界システム、革命やイデオロギーに関するシンポジウムやセミナーなどで積極的に議論を展開していきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①田沼幸子、＜あいだ＞の言葉を聞く――人類学者と映像の可能性、コンフリクトの人文学、査読有、第２号、2010、161-181

②田沼幸子、序（特集 Rethinking “the Visual”――人文学にとっての映像とは）、コンフリクトの人文学、査読有、第２号、2010、127-133

③田沼幸子、序（特集 Rethinking “the Visual”――人文学にとっての映像とは）、コンフリクトの人文学、査読有、第２号、2010、127-133

④田沼幸子、同志たちの愛のあと――創設フィクションとしてのキューバ革命、リプレーザ、査読無、II 期１号、2009、75-94

〔学会発表〕（計１件）

①田沼幸子、革命キューバの民族誌的研究について――ポスト･ユートピアの希望を語るために、日本ラテンアメリカ学会、2007 年６月２日、南山大学

〔図書〕（計１件）

田沼幸子、他、人文書院、ポスト･ユートピアの人類学、2008 年、380

６．研究組織
(1)研究代表者
田沼 幸子　(TANUMA SACHIKO)
大阪大学･人間科学研究科･特任研究員
研究者番号：00437310